

史料1

早稻田大
学に入る
事で、少いと高等学校にはいる気はなかった。あるいは、このまま出立を済む学校
にとどまり、中等教育の試験を受けよかなどという。気楽な考え方だ。それには、この同じ学校に教員をしていた先輩で、英語と数学のよくできた丸山茂吉という人が
あって、その人自身が英語で通じた経験には行ったが、もちろん入学はできなかつた。普くのも、
それでも、とにかく高等学校の実験には行ったが、もちろん入学はできなかつた。普くのも、
あまり、「いいの良い」とではないが、かくて私は中学で二回、高等學校の入学試験で二回、
落合に合格したのである。

しかるに、この私の、のんきさで、ひどく自己しててくれた人があった。それは、やはり昭月
郎の弟子で、私の父分にあたる飯久保義三師であつた。

飯久保師は、山梨県中巨摩郡小笠原村の田舎の出で、珍しい學問好きの秀才である。昭月
郎の弟子になつたら、そのためであった。私は十歳ばかりの年長で、山梨普通學校を卒業
し、東京に出て、正則英語學校に学び、當時神田の開成中學校の英語の教師をしていた。幾年
は神奈川県大學生の塾大寺に住まし、先年死去した。

この飯久保師が、明治三十六年の高等學校の入學試験の終った後、わざわざ東洋にきて来て
て、私にぜひ早稲田大學の入學試験を受けると勧めてくれた。これは、まだことながらたいへん
めであつた。もとよりこの時、なお山梨普通學校に「すくすく」していたら、翌年は日露戰争で「私
も召喚され、あるいは戦闘にあたりて戦死していかつたとも限らない。しかしに幸いに甲組
而大學に入學したため、明治三十七年、選舉期にあつたが、徵兵の延期を受けること居た。

戰争には行かずに入った。

史料2

兵役法【抄】

一九一七年(昭和二年三月三一日)〔官報四月一日〕

法律第四四七号

兵部省セシム

御名 河野

法律第四四七号

昭和二年三月三一日

〔官報四月一日〕

表2 大学・高専校在籍数(昭和18年10月現在)、微兵検査受検者数、18年12月入院者数 推計表
(大学)

学年	文科系()内は校数			理科系()内は校数			合計	微兵検査受検推計B× [%]	入院者数A× [%]
	官公立	私立	計A	官公立	私立	計			
4年1	—	—	—	1073(14)	445(3)	1518	—	1518	1366[90]
3	3973(8)	7502(23)	11475	4622(15)	1241(6)	5863	297(2)	17635	15871[90]
2	4176(9)	8931(23)	13107	4759(15)	1493(6)	6252	317(2)	19676	17708[90]
1	4150(9)	9209(23)	13359	5081(15)	1409(5)	6490	317(2)	20166	14115[70]
計	12299	25542	37941	15635	4588	30123	931	58995	49061
夜間部計	2281	(3)	計2						28877

[高校]

学年	文科系()内は校数			理科系()内は校数			合計	微兵検査受検推計B× [%]	入院者数A× [%]
	官公立	私立	計A	官公立	私立	計			
専門4	—	—	—	571(3)	571	571	571	513[90]	—
専門3	421(2)	1150(4)	1571	1114(13)	2059(11)	3173	593(2)	5337	3735[70]
専門2	6570(35)	16808(66)	23378	12263(63)	6807(32)	19070	10644*	53032	22298[42]
専門1	7470(35)	20830(66)	28302	14653(66)	9814(34)	24467	13440*	66209	7945[12]
計	14461	38790	53251	28030	19251	47281	24677	125209	34491
夜間部計	10457(11)		* 開業系134校 (中等教員23初等教員55 青年学校教員55)						
高専2	2901(28)	217(4)	3118	4941(28)	256(4)	5197	8315	3492[42]	1247[40]
高専1	2942(28)	219(4)	3161	5618(28)	351(4)	5969	9130	1095[12]	347[11]
計	5843	436	6279	10559	607	11166	17445	4587	1594
大学予科2	616(4)	6925(24)	7541	413(1)	1703(7)	2121	9662	4058[42]	3016[40]
大学予科1	590(4)	7404(24)	7994	419(1)	2192(8)	2611	10665	1272[12]	879[11]
計	1206	14329	15535	532	3900	4732	20267	5330	3895
高専計	21510	53555	75065	29421	23758	63179	24677	162921	42408
高専計	19005								

基礎資料「文部省第71年報 昭和18年度」 参考資料 東大経済学部「入室・応召届報」「東京商科大学入院者名簿」「東京外國語学校」学籍簿

(注1) 大学4年は昭和16年4月入学、3年は17年4月入学、2年は18年10月入学、1年は18年10月入学の学生。専門学校4年は15年4月入学、3年は16年4月入学、2年は17年4月入学、1年は18年4月入学の学生で、高等學校・大学予科2年・1年も同様。

(注2) 夜間部学生・生徒は年齢幅が大きいと考えられ、一定比率で入院率を算定することは困難なので算定外とし、参考のため大学・専門校別に総数のみ記した。

表3

東京帝國大学生の入營・入団者数 (単位:人 比率は%)

種別	学部	43/6	43/6	43/6	43/6	43/6	43/12	43/12	43/12	44/8	44/8	44/8
		在籍	応召	入營	合計	比率	在籍	入營	比率	在籍	入營	比率
学部	法学部	2,195	17	47	64	2.91	2,161	1,382	63.95	2,145	1,433	66.30
	医学部	657	1	5	6	0.91	651	7	1.07	651	7	1.07
	第一工学部	1,202	5	11	16	1.33	1,289	32	2.48	1,281	32	2.49
	文学部	1,110	25	17	42	3.78	1,204	391	32.47	1,179	668	54.96
	理学部	426	0	5	5	1.17	455	13	2.85	454	12	2.64
	農学部	614	10	11	21	3.42	636	134	21.06	630	162	25.71
	経済学部	1,134	6	12	18	1.58	1,193	761	63.78	1,193	846	70.91
	第二工学部	847	0	5	5	0.59	1,266	13	1.02	1,265	17	1.34
	合計	8,185	64	113	177	2.16	8,855	2,733	30.86	8,798	3,157	35.88
大学院	法学部	29	2	1	3	10.34	55	4	7.27	52	5	9.61
	医学部	30	5	0	5	16.66	40	5	12.50	35	5	14.23
	第一工学部	40	1	20	21	52.50	59	25	42.39	59	23	38.98
	文学部	154	38	10	48	31.16	204	55	26.96	189	52	27.51
	理学部	62	3	27	30	57.69	86	49	56.97	82	52	63.41
	農学部	23	3	3	6	21.42	49	8	16.32	41	9	21.95
	経済学部	10	1	1	2	20.00	22	2	9.09	21	1	4.76
	第二工学部	0	0	0	0	0.00	8	0	0.00	8	0	0.00
	合計	343	53	62	115	33.52	523	148	28.39	487	147	30.18
	総計	8,523	117	175	292	3.43	9,378	2,881	30.73	9,285	3,304	35.58

1945年12月のデータでは、朝鮮入学生15人と台湾入学生1人の入營 (ともに経済部) を含む。

表4

表5

表6

表7

表8

表9

表10

表11

表12

表13

表14

表15

表16

表17

表18

表19

表20

表21

表22

表23

表24

表25

表26

表27

表28

表29

表30

表31

表32

表33

表34

表35

表36

表37

表38

表39

表40

表41

表42

表43

表44

表45

表46

表47

表48

表49

表50

表51

表52

表53

表54

表55

表56

表57

表58

表59

表60

表61

表62

表63

表64

表65

表66

表67

表68

表69

表70

表71

表72

出陣の日を越よ過る　今日送る精銳学生　年前八時から

本学往復式

一九四二年昭和十八年一月四日〔三〕

出陣の日を越よ過る　今日送る精銳学生　午前八時から

奉茶茶行式

一九四二年昭和十八年一月四日〔三〕

時は秋、うまし原風はしく山登るに空すみわたり。われら男の子、せんの命を祖国に捧ぐ日今までに空すむにあらうまし國を守らん。われら祖国の體に生還を期せず。學生の忠誠は你が上にも望く。敵襲滅の一念に進ゆるのみ——さてやや旬日後に進つた先生の日を指さり故へ贈出陣学生の首通を飾る數々の儀はは當時教練検査以前を第一期とし検査期間中にはよく中止されてたが八日の同学会に出立記念掲揚式を以て第一期の幕を開けた。五日から廿日におなるこの期間は軍械検査の結果もわがり從つて学生のみも入選すべき生死に帶じた心情にとつてはこの種の確実は専更に感銘深きものがあつた。

八日

出陣学生が學園と前線を結ぶ橋にとど残して近く出陣記念

橋の掲揚式はさる八日大留草のよき日、開學會主催のもと午後一時から西部構内地畔の掲揚台に奉行、走飼鹿籠閣牧場、並河功、池田英一、井島知、沙見三郎、谷口吉、春らの教育、向学全般展をはじめとして法科部の出征学生約五百名を集め國旗の國旗の國旗を代表して縦三

回生見定三君「今後のいなる前線にあつても」の吉田山院にはためく自尊意に思ひをはせんと力強く決意を鼓舞されられ、はたと高鳴るのであった。最後に開學の萬歳を三唱、「時十五分散会したが征くものも留るもの

この大國旗を通じて原々と高打つ学生樂誠の心を新たにするところがあつた。

十一日

午後三時から文化部主催で「能楽鑑賞会」が全館

能樂堂を開かれた。延遠をして今度おが古典の真

極にふれておかんとする学生の想みはこに達せられ

能樂をすすめ立派の地なみ説明のうちに能樂中の絶品「松

風」が金剛院一門によつて上演されたがこれには既管

のとく金剛氏が最近入手された由緒ある古面を用ひら

れ、見るのも演するものも空を思ふ玉情の美しい系に

詠歌をすすめで放送した。

夜は六時三十分から文化部主催で「能楽鑑賞会」が全館

能樂堂を開かれた。延遠をして今度おが古典の真

極にふれておかんとする学生の想みはこに達せられ

能樂をすすめ立派の地なみ説明のうちに能樂中の絶品「松

風」が金剛院一門によつて上演されたがこれには既管

のとく金剛氏が最近入手された由緒ある古面を用ひら

れ、見るのも演するものも空を思ふ玉情の美しい系に

詠歌をすすめで放送した。

十四日

この期間中の日程にあたる十四日は秋空のもと各種の行事

が開催と慶祝された。

第五回演劇ではこの日をもとして練成大行進を実施。

午前八時半開幕は開幕式で練成大行進を実施。

教導部では部長引率のもと山中越で紅葉

葉づく忠翼の里に出立近江神宮に参拝、出陣学生連隊長

明あり、十四日には午前九時半法華寺南大門前に集合充教

徒大招徳（博士が講師となり法華寺の「法華」）について講

話せられ、また夢殿、中寺寺にいたり秋色源を斑鳩の里の

あたり今は満ひ残る飛鳥人の音を聽び国土への愛を充実

のことを新たにしてこの有意味な会を開いた。

第五回演劇では午前八時四分大宮に集合大阪第二刑務所

にいたり見学、一部は同乗航行を行ひ、射撃部では学内

相撲射撃大会を大宮射撃場で午前八時から参行、各部と

も秋の一日をみのり多く選ばれた。

牧教二「歴史的使命に生きよ」（京都帝國大学新聞）一九四三年

一月五日付

て学生側からの質問に応じながら堅切に応答、時をうることの重要性を指摘、木村教授は学生出陣のむつ意義の説明を告ひ、李徳の説りをもつて従々ぐれことを強調、ついで法戦下における学問の使命について学生側から質問が出たに対し教官側からは平時と法戦下における学問のあり方について説明、学問の秩序が平時と戦時において変化していないこと、勝たんがためにはすべてを戦争に捧ぐべきであることを説明、このまれにみる示唆に富んだ座談会は約二時間にわたつて、けられ四時十五分間全した。

十七日

特別講演「柳に就て」は鈴木大拙博士を招いて午後二時から法經第四回教室で開催、まづ高島助教授の紹介の辞あり、ついで鈴木博士登壇、柳の歴史についての説明からはじめて如何なる過程を通じて柳が印度から支那を経てわが國に入つて来たかを説明し、柳の本質について明快なる解答を考へ、柳が深く生活の真相と結びいた所以からわが國における生活との結びつきに深い影響を示し、五時頃散会した。

十八日

文学部学生会主催の社説会は決戦下にさはしく新人生誕迎会をかねて午後三時二十十分文学部玄開閣には集会、直ちに記念撮影につついて学生集会所で昼食をしたため茂山社中の延遠を鑑賞三時ごろ散会した。

十九日

文学部学生会主催の社説会は決戦下にさはしく新人生誕迎会をかねて午後三時二十十分文学部玄開閣には集会、直ちに記念撮影につついて学生集会所で昼食をしたため茂山社中の延遠を鑑賞三時ごろ散会した。

二十日

法學部社行大講演会 法學部では午後一時から法經第四教養会で社行大講演会を開催、中田阿教養の左の如き講演を行ふ。

日本世界観の立脚地 中田博士

は有信会では午後五時から本部階上大ホール（西開観室）

で有信会社行金をひらき競争とともにして又字通り半開観室最後の日を送る。

諸君の成長は皇國日本が眞剣的にも国内的にも、業界以来常に深刻基盤が、諸般の方面において影響する。これは、極めて深刻な分裂を呈するに至つたのは、恰も諸君の幼年時代であつた。日本は東亜に於て一箇の独自の立場を有したが、満洲事變が突然した時は、恰も諸君が凡て小学校にいた頃で、此頃から東亜の今日の形勢は固より、世界の恩恵に対する現代に屬し、身心共に現代人として成長したのである。世界が自由主義と共産主義と全体主義との三つの陣営に對立して世界が眞剣にその統一となり来たのである。満洲の建設、国際聯盟から脱却、二・二六事件其の国内に於ける諸多の動搖を経て、支那の脱却、二・二六事件其の国内に於ける諸多の動搖を経て、支那の脱却となつた。

諸君の成長は皇國日本が眞剣的にも国内的にも、業界以来常に深刻基盤が、諸般の方面において影響する。

第一次世界大戦以前よりも深刻な分裂を呈するに至つたのは、恰も諸君の幼年時代であつた。日本は東亜に於て一箇の独自の立場を有したが、満洲事變が突然した時は、恰も諸君が凡て小学校にいた頃で、此頃から東亜の今日の形勢は固より、世界の恩恵に対する現代に屬し、身心共に現代人として成長したのである。

大學生に対する非常措置が、諸般の方面において影響する。

第一次世界大戦以前よりも深刻な分裂を呈するに至つたのは、恰も諸君の幼年時代であつた。日本は東亢に於て一箇の独自の立場を有したが、満洲事變が突然した時は、恰も諸君が凡て小学校にいた頃で、此頃から東亢の今日の形勢は固より、世界の恩恵に対する現代に屬し、身心共に現代人として成長したのである。

大學生に対する非常

「先日、大内君から便りがあった。大内君は僕が殺死する事など算えてはならぬといふ。自分の任務でない所で死ぬのは、ヨイジムの一種の迷惑である。そんなのは愚かし可い事だと思つ。また反動的な任務で死ぬのはいけない。そんな死に方をした時に感心せぬといふ。しかし、自己の命に出る事も自分に与えられた充実ある任務であると感づいてゐる。現下の日本に生きる青年をして、この世界史の創造の機会に参画出来るのは始末の至りであると思つ。我々は死物狂時代で手取られた経験とての西洋哲学を研究して来た。この道を自由選んだ自分の精神であるからだ。その上に体力に恵まれ、活動能力を人並み以上に持かつた部分としては身を國のためには伸び得る精神なる意識をもつてゐるのである。二つながら高潔な意識であると思つ。種の性格が反動であるが否かは知らない。だが経験や實績は課せられるものであり、それを果すことが我が母國の自説なのである。全力を尽したい」と思う。反動であらうとなからうと、人として尊も高く、しかし誠実な努力の中に死にた(と思う)。想に掲げられる事は後悔は欲しない。後悔實際に偉いと呼ばれる事も豈まない。名もなき臣とし貴分の眞理と貴任に生き、そして死するのである。

史料14-1

十月十二日 二十九

はならない。ぼくは、もはや日本を讃美すること、それすらできないのだ。むしろ幕末にして有害な感情として排除したい。

戦争は、固体摧毁のためではない。そうではなくして、日本の基本的性格と、そのあり方が、日本という国家に、戦争を不可欠な要素たらしめているのだ。現実に、日本が戦争を必要としている事実こそ、戦争への道なのだ。

ぼくらは、この戦争に耐えねばならぬ。そして根本的に日本の國家をよくしよう。それは、日本人の人間そのものをよくし、元氣をせるために、もつとも効果的な方法なのだ。

だが、ほくじこの戦争で死ぬことが、我ら世代の宿命として受けとらねばならない。なぜかが、根本的な問題について、ぼくらは発見し、批判し、是非を論じ、そして突然なる態度で行動する。そういううらやましさと夷情性を剝奪されたままの状況で戦場にでねばならぬためだ。だから宿命と言うのだ。

戦争で死ぬことを、かからる要求のなかで死ぬことを、腹えたいとは露ほども思ふ。そり、あらゆりにひどい精神のゆえだ。

ああ、すべては宿命だ。その宿命を世代としてしないながら、努力しながら、しかも、これに抵抗しなければならぬ本音のなかに、われら、人の子の悲しき定めがあるのだ。感情は恐ろしい。だが、理性に従わねばならぬのだ。精神が空んではならない。

我が心の生きるまで、友人を真義こめて愛しよう。



図1 特攻隊関連地図

参考

支票14-9

(五) 一九四九年七月一日

しかしおれは、軍隊に奉仕するものではない。おれは現代に生きるさうのためには、いかにも強き、しかし柔軟な、とさ車人になるために生きるのではない。その点におれは、僅かな自由をもつて、志の途を進出するのだ。

にする感情が起つてゐる。
つまり、とも、わけが利らぬ、とも、人は言うがよい。
おれはただ、全体のために生きるのはないのだ。全体がその生命を得ぬと、個人の生命がまつとうできぬがゆえに、おれは生きるのだ。この意味で、おれの日本魂は、純粹でないと言えるがもしれぬ。
しかしおれは、典型的な日本觀よりも、たとえ利己的なりといえ、少數の数多する人々のための日本觀なのだ、と断りたい。
それは抽象的觀念で生きる人間ではない。おれは直接、おれの胸にダンときて抱擁しようもののは、たゞに生きるのだ。
おれはまだらん哲学者ではない。おれは歴史家だ。文学青年だ。そして市井の人だ。

それらしく生きれば何なり！

士官の間に激しき論議騒ぐ
必敗論王道的に強し
「大和」出動の当然不思議なるべき諸条件の苟合
水軍の末だからこそ重なる懸念
情報により確認せる如く、沖縄周辺に特徴せる強力かつ大量的機動艦隊群
大海戦に前例を絶ぐる航空兵力の決定的要綱
併せて発進時期、出動経路の疑問
提灯を擧げてひとり暗夜を行くにも等しき劣勢といふべし
豊後水道にて遼早く潜水艦に撃つかん
あるいは海上ばに航空機に路れん（青年士官の大勢を占むたるこの予測は鮮かに的中せり）
精烈なる必敗論議を傍らに、明成長・日鷹大尉（一次監修、メテガシ）、藤原の洋上に眼鏡を向けしまく騒ぐ如く音う。
「進歩のない者ば決して勝たぬ」負けて田舎めう」とが道上の通だ
日本は進歩と云ふことを軽んじ過ぎた。純的なる新穎や敏速などだがて、本当に進歩を怠っていた。敗れて自覚める、それ以外にどうして日本が敗れるか、今自覚めずしていつ抜われるか、能たらちはその先導になるのだ。日本の新生にさきがけで敗る、まさに本筋りでないか。
彼、白鷹大尉の持論にして、また通曰「ガンルーム」に拂散せる死生談義の一応の總論なり
「敢えてこれに駆駁を加え得る者はなし」
山賊気配の濃密化とともに、青年士官に瀕漫せる煩悶、苦悩は、吵しまき論争を惹き起ます。
んばやます
敵艦攻撃の寸前でに驚く驚く、決定的敗北は坐なる時間の問題なり——何の故の敗戦ぞ
何故かれば日本は敗れるか
また第一講習會たる我らが命、旦夕に迫る——何の故の死か、何をあがない、如何に頼い
命を乞ひ死か
医学校出身の中尉、少尉、口を開きて言う、「國のため、君のために死ぬ。それでいいじ
やないか。それ以上に何が必要なのだ。もう一度言す、「きじやないか」
字徒出身士官、色をなして反問す。「國のために戦る。それは分る。だが一体それは、
どういうことよががてているのだ。他の死、他の生命、また日本全体の敗北、それを更
に一般的な、個別的な何か個體としようようなものに結び付けたいのだ。これが一切のこ
とは、「体國のためにあるのだ」
「それは理窟だ。」「しかし有資格な理窟だ。」同様は特攻隊の菊水の「マーク」を御
付けて、天皇陛下万歳と死ね、それで燃しくはないのか」
「それだけじゃ嫌だ。もっと、何かが必要なのだ」
遂には放逐の所、監禁の修羅場となる。「よし」、そういう構った性根を叩き直してやる。
日鷹大尉の右の結論は、出走の前罷、よくての論戰を諦めて、仮想に成功せるものなり

本ら筋引ひこまへまするが私を心むかへて下さい。心から生光、私を信じて下さい。立派にやりますから御安心下さい。私の名前位に隠れるとお新聞に載るとおもは一つの羞恥でもあります。そろそろ事は隠せしないで下さい。必ず貴士らしく、日本新聞に載らるるがまほめまするが私を心むかへて下さい。

「貴士の眞實に中止朱記で、不誠誠に今迄おもむりておもつて居るが日本には必ず歸ります。決して食ははしない」と西口謹蔵の娘の心が感ぜられます。大抵は娘の胸の内に張つてゐるが故、又「般若心經」の人々の心地、小さい頃阿彌陀の親友の別離、「そして自分の今の心地を眞みれば神州不滅やむから便にられます。」こんな貴士性で表し出来るのは實に美しく嬉しいです。

世界の他の国は知らず日本に隠す限り御見びで山出なさうです。皆もしつかりやうで下をいふ久保家の豪傑（宋文律で結構です）の第一は「何事も大器の御為に」であつて欲しいです。（一）

一日大器のよんあん足す我が家の慶へ（もつて下さい）。

博古（長兄）義徳（玄次郎）には別に私が其の身ひ違してやつた事もなかつた様です。しかも

内面の心なし。生徒は、遅るに異へ、回想するは遅く、食事は一つの楽しみである。しかし食事もまたがけなく楽しむことは、生徒は得意である。それはほんまからのお腹感というものがない。歯列さがなレベンゲンナーティゼでない——レーンは、レーヴンの名に恥じない。

明け方の王室御用所領に起きたら、鉢本をねむたサントリ御用所領の御室を出立つていた。私大文字が好きで、マーチスの「藝術を愛する」などを読み漁りたりしたんだが、眞理の知識は種々なもので、おもしろい。北山七郎はさておき、オリオン、カシオペアなど、どうでも知らぬで見ていてる星座ですから、まるで見てておもしろいくらいである。天文儀法寺令吉郎に垂訓化せられたんだが、かなりの知識を説いておもしろいものである。

おお、四次元空間が明白表現のものか、自分に心地いい。

二月二十一日 蘭
久人五分金賞受合、司令講演。蘭のたまを改めんが為に講習料を取が解消し、遂に所要費の半分を増加して新規を講習が切れる事も無事通り。次で講義より評議に先送る。
私は第六回となり、東洋学生十三名。能美氏は田中副尉なり。東洋から教長より各自の筆書きを送る。私は第一回第三番目。二年後は田中少佐、而して一書籍は田中少佐、田中副尉にてあるなり。これに感動する。『にんにん』に感動するより、田中少佐の筆が感動しては共に来る。田中少佐の筆が感動する時、其の筆に感動する時、感動する。而して筆ひに何に感動するか、うとうとし、勿論なし。然れども頗るなやうに、その實に何を感動するか、其の筆觸、感動の筆触、筆觸の筆触、筆觸の筆触に感動するや。書き留め、土産を送りに来たばかりの

三月一日 新
酒呑詫語を読んで、「死生」は物語の所に。死生に就いて「いつまでもいられるがある。」
曰く、「我身天帝也、死き三擧復生也。」(天帝著我)。死生不休、老病不除、生歿未嘗知舊也。即我之死
亦自然而死耳。死本無常也。死生(而天死也)。醉天(醉國)……
死後間生不生。未之前聞御天也。酒呑先生之所以為死生者生也……」アーヴィングの死後間生不生論である。

三四四十一日 開帳晴
一、第一小隊開幕式にて幕方に落成と承す。二中隊は四日。武々三中隊は十日なり。
新天に慶祝の歌をうるが歓し。雙葉は既にうきたる歌をうべ。舌き由は歌をうべ。全員歌をうべ。
新天の歌行録の歌を歌をうべ。

「おや、おや」と驚く。男はまことに手帳と託すものに困らなかつたなり。
「一年身の繩りを整へ、活動と進めて、母の元に帰る事なれば、必ず冬を入れ、一日の解説を取り
直し続ひ思ひを重ねかづつ、頑張る事なり。
だいぶ遅いのは承知の上に、お手を貸すが、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、
お手を貸すうしに、お手を貸すのみなり。

「元の世界」

いよいよ最後のお便りをする事が出来ました。想へば莫と長い間ほんとに御世話になりましたが、今までであります氣の短い見足りとも色々はんて不遜な私でありますので最後の心から愛して下さり、事を今更の気くから感謝の意を表します。思ひがく薄に私は色々な点で不相応な説は獨創的と思まれて來る事をしてみじみと感じます。

現今すべてに対して眞誠の気持ちで一杯です。ただ兄さんや姉さん方に向つて御禮申し出せます。それらの事が申度なく氣入りと云へは気恥りです。どうもられたゞ又田に對しては、私が少しほは行もせねばと目を見かけた様所謂「萬葉の歌」と言ひますかでと又田七へ。今は兄さんや姉さんには何が尽くさればと思へば國のためとは云へそれがほす申誤りありません。しかレ又田

ため正に日本始まりて以来の最大の大困難の状に困るるに一身を擲げるのですから、云はば

これが父母兄さん姉さん等に対しても別な恩情や恩徳感にござる所の御返答であります。どうも私の様子を後間に聞かれましたら恐しまずすと喜んで下さい。そして尊正と秀徳「仁次兄正傳記」を久保原の考として深く御注意と見て貰て下さり。私も最大の希望を二人に運びておます

仁作博士兄さんがあんなどないて推測したのと同様が最も解いて御の名を挙げてやむひとをかん心し

〔以下原稿一人一人について記しあり。〕

お手紙を貰ひて、これにて御便りも一通り終りました。すべての人々に対して感謝と又生命のないままの草木を始め、他のものにもお世話をすがり合ながたに心地悪ですががんばらるる所が何より要です。お手紙を貰ひて、それで御便りも一通り終りました。すべての人々に対して感謝と又生命のないままの草木を始め、他のものにもお世話をすがり合ながたに心地悪ですががんばらるる所が何より要です。

